

# 鬱金香

張 愛 玲

徐 青 記

〔訳者解題〕近年、一種のブームとなって張愛玲作品の人気の高まり、その埋もれていた小品も「発掘」出版されるという現象が、台湾、中国本土問わず多く見受けられる。その真贋考察や考証経緯などばかりでなく、そうした張愛玲現象そのものをも含めて、何れ詳細に検証すべく準備しているが、その研究対象素材として、取り敢えず、ここにそうした一例である「鬱金香」と題する張愛玲の「新たに発見された原稿」を翻訳紹介しておきたい。この短編小説「鬱金香」は、北京の学者呉福輝と彼の博士学生の李楠が、「上海の小新聞（小型新聞、タブロイド判新聞）」に関する専門研究の過程で、偶然ある小新聞に「張愛玲」と署名のあるこの連載小説を発見したことにより、現在世に知られることになった作品である。「鬱金香」は1947年5月16日から31日まで『小日報』に連載された。これは張愛玲創作の巔峰期の作品であるだけでなく、当時彼女が唯一完成した連載小説である。これが張愛玲の作品であると確定されたのは、発見されてから2年も経た2005年になってからのことであった。「鬱金香」と名付けられてはいるが、「チューリップの花」とは関係ない。女主人公の名前が「金香」なのである。この「鬱」という字は、その彼女の鬱々として楽しまない心情を指している。（徐青記）

\* \* \*

金香はとても苦勞して、観音開きの重そうな古式扉を両手で壁の方に押して収めた。扉のこちら側はリビングルームである。壁には中国の山水画を掛けていた。それはガラス張の額に入れられていた。重い紅木の枠が、輕描淡写された画の上を押さえていて、相性はよくなかった。まるで、薄い麻の生地チャイナドレスの外側に、幅の太い黒い縁を留めたような感じがする。当時、ご婦人達の間では、油漆で花<sup>(1)</sup>を描いて、その上に光る小さい珠を付けた生地が流行しており、閨房風雅な事柄となっていた。ご夫

---

(1) 中国語原文は「油漆描花」。何か油性や漆類の塗料で花を描いていくのではないかと考えられる。

人たちは自分の靴<sup>(2)</sup>の上に花模様を描いたり、ソファ・クッションの上にも同じ様な花模様を描いたりした。ただ、このくらい小さな女性の手は、真っ暗で大きなリビングルームの中では何も見えなかった。

扉のむこう側では、陳宝初、陳宝余兄弟が朝食を食べている。二人は彼らの義兄の家で夏休みを過ごしていた。姉と義兄は、そこでは「奥様」と「旦那さま」であるので、二人は大舅老爺と二舅老爺<sup>(3)</sup>と呼ばれていた。とはいえ、二人は未だ若い大学生である。いや、宝初は今年大学を卒業したばかりであった。この日、宝余はひたすら燻製魚の頭や骨などをテーブルの下にいる犬に投げ与えていた。宝初は言った。「おまえ、あまり犬をからかうもんじゃない！　ここがこんなに汚れてしまったじゃないか！」宝余は笑いながらこたえて、「見てよ、このチビ、本当に面白い！」彼は、若い小間使<sup>(4)</sup>の金香が歩いて来たのを見て、ますます嬉しくなった。炙った鶏肉をちぎって犬をからかって、やたらに犬がテーブルの上にまさに跳んで来そうである様子をさして、彼は笑って言った。「金香、見てご覧！　ほら、おもしろいだろう！」金香はちらっと宝初の不快そうな顔色を見て、「あらまあ！　この犬は入浴させなくちゃいけませんわ！」と言いながら、帚と塵取りを取りに行った。そして、「お掃除しますので、もう食べさせないでくださいね！」彼女がそう言うと、宝余は手を止めた。面白くないと思い、ばつの悪そうな顔をしてお粥を食べはじめた。

金香は床を掃いてから、犬をつかまえて、言った。「さあさあ、水浴びしに行きましょうね」。この犬は、黒と白の花模様のチャウチャウである。顔は白くて、頭の上から黒い糸状のような毛が掛けられている格好になっている。上半分の顔を埋もれて、まるで女の子のようで、大きな眼玉を丸くして、その前髪の後ろから人を盗み見ている。

金香が犬をふところに抱っこしていると、宝余は前に近づいて来て、犬の顎をすくい上げ、笑って言った。「見て、見て、私たちはとても美しいで

---

(2) ここでの靴は、かつての中国女性がよく履いていた、綿、シルクやウールなどの生地で作られた靴を指す。大抵、服を作った後の残った生地で作る場合が多かった。

(3) 中国語原文は「大舅老爺二舅老爺」。日本語で直訳すると、第一番おじさん、第二番おじさんという意。

(4) 中国語原文は「丫頭」年の若い小間使を意味している。

すね、前髪……、そしてこのようなまなざしを持ってきみ<sup>(5)</sup>と同じですね。残念なのは顔にほお紅を塗っていないことだけです。金香が抜け出しで行こうとしたところ、宝余は一本の指で犬の首飾りを引き寄せた。彼女は言った。「二舅老爺、でたらめはよしてください」。宝余は「なぜ、きみは紅を塗らないの?」と言った。金香は、「誰が紅を塗っているのですか?」と応えた。しかし、彼女の顔は確かにとても赤い「紅顔」である。前髪と濃いまつげは目に入りそうになっていて、それらは両目を虐めていつもみずみずしくしていた。丸い顔、細い腰回りだが、同時に肥ってもある。花模様の短い服と長いズボンを穿いている。薄いブルーの綿生地の上に小さい緑の芯のある白い花を積み上げている。彼女は照れ隠しに犬を抱っこして、さっさと行ってしまった。そして独り言を言った。「犬は何日も洗わないとノミが多くなります!」宝余は彼女の後ろについて行って、あわてふためいて叫んだ。「おや、本当です。こんなに沢山のノミがいます!」金香がびっくりして後ろを振り返ると、彼は彼女の背中を手で撫でて言った。「あやや、ここにいます!ここにいます!」金香は怒って言った。「二舅老爺!本当にもう!」宝余は厚かましく笑いながら、「本当に……何ですか?本当にいい、でしょう?」と言った。金香はすでに行ってしまったので、彼女には何も聞こえてはいなかった。

最初、宝初は何も言わなかった。たとえ自分の兄弟であるとはいっても、やはり異母兄弟である。二人とも妾の子供であり、宝初の母は早く亡くなった。あの時、宝余の母は未だ娘が一人いただけであったので、宝初を彼女に割り当てて、育てさせた。その後宝余が生まれた。このような環境の中で大きくなった宝初は、本来静かな人であった。今年、この夏を過ぎて、さらに沈鬱な気分になった。学校での勉強を終えて仕事探しをしなければならず、まるで娘から嫁にでもなったかのような具合だからだ。さらに世の中の艱難を深く知るようになった。今日、彼は本当に見てられない気分になったので、金香が去るとすぐさま、宝余を叱った。「二弟<sup>(6)</sup>、きみは本当に、いつもこのように金香と、口先軽く、ぺらぺらしゃべって

---

(5) 金香のことを指している。

(6) 「二舅老爺」の宝余は長幼の序では二番目であるので、中国式で呼べば「二弟」である。

いる。そんなところをヒト様に見られたら何と言われることか！——義兄に知れたら、こまったことになるぞ」。宝余は笑って応えた。「どうしたの？ 私が金香と話をすると、兄さんはいつも見ていられないという感じですね。いつもそのようなたてまえを言うのだから！」彼はテーブルに戻った。

そして、心ここにあらずのようにまた茶碗を持ち始めた。お箸で皿の漬物をほじくり出したり、突き抜いたり、底までひっくり返した。宝初は言った。「それはどういう意味だい？ 少しは考えなさい。我々は姉の家に泊めてもらっていて、いろいろなところに気をつけないといけないのだから！」宝余が、「姉さんは私の血を分けた姉さんだよ。そんなふうにいわれると、かえって親しみが薄れちゃうよ！」と言うと、宝初はもう何も言わなかった。

金香が水を取りに行った厨房で、犬を入浴させようとしていたところ、老夫人<sup>(7)</sup>も厨房に入ってきたのを見かけた。老夫人は小麦粉を水で調合をしている。金香は笑って声をかけた。「朝早くから老夫人はもう厨房でお仕事ですか？」金香は、以前の夫人<sup>(8)</sup>の女中であつたので、主人が後妻をめとると、阮邸宅の遺少<sup>(9)</sup>となった。彼女は利発な人であるので、仕方なくわずかな歩みにすら気を遣っていた。特に、おべっかを使うのには余念がなかった。阮夫人のお母さんは元々妾であつたのが、金香だけは彼女を老夫人と呼んでいた。

この老夫人の体はとても福々しい。ただ、身長が少し低いので、いつも頭を上に向けるようにしていた。顔全体は元が大きな一枚であるのに、いつも下の方にぶら下がるものだから、少し裂け目が出来た。一重の小さい目と唇のない口となった。彼女は北京の一般庶民出身の娘であつた。義和団が二毛子<sup>(10)</sup>を殺戮していた時には、彼女も驚き恐れた。家財はすべて奪い取られて、彼女は陳府に売りさばかれた。初めは小間使として使われて

---

(7) 宝余と宝余の姉（阮夫人）の母を指している。

(8) つまり、亡くなった宝初の母の女中。

(9) 普通は、前王朝に忠節を尽くして新しい王朝に仕えようとしないう若者を指すが、ここでは、金香が前妻の使用人であるという阮家での微妙な立場を示している。

(10) 中国人と西洋人との混血児を指す。

いたが、その後、妾となった。

何十年も立ったが、彼女はまだ北方の貧乏な（家族の少ない）家の興趣を保っている。まるで『兒女英雄伝』<sup>(11)</sup>の中の張大媽<sup>(12)</sup>のようである。この「張大媽」が空模様を見ると、あまり良くなかった。「何を作って食べましょう。雲り日を過ごすのだから！」と言った。彼女にも厨房に居る似たような訳があった。金香に向かって、こんな風に言った。「今朝起きてから、口の中がどうも味気ないものだから、鳥ガラスープで麵魚子<sup>(13)</sup>を作って食べたいと思ったの」。彼女は、麵を調合する茶碗を蛇口の下に置いて水を加えようとする、蛇口に付いていたゴムのパイプが滑り落ちて、水がパシャパシャと跳ね上がった。金香は、「おやおや、老夫人の靴の上に水が跳ね上がりましたよ！」と言った。お腹があまりにも出ていたので、老夫人には自分の靴が見えないのだ。金香はすぐにしゃがんで拭いてあげた。

水を沸かして、金香は一壺の水を手につけながら、犬を脇に抱えて、二階に上がった。すると、彼女は脚の上、腰のまわりと身体中が突然痒くなった。彼女は慌ててまごまごしてしまった。原因は、犬の体にあったノミだということがわかった。犬を降ろして、急いで衣服を着替えて召使の部屋へ行った。この召使の部屋は、ごちゃごちゃしていてどこもかしも、ベッドやトランクや行李の類などでがちゃがちゃしていた。もしノミがベッドに行ってしまうと、これは大変なことになる。彼女はちょっと考えを変えて、最初犬を入浴させるために準備した、あの一壺のお湯を、ひとまず赤塗りのお盆<sup>(14)</sup>に入れ、脱いだ服をそのお湯の中に漬けた。扉は閉まっていたが、万一人が入ってくるかもしれないので、彼女は扉の後ろに立った。きれいな一組の衣服をベッドの欄干に掛けていたので、彼女は、頭から肌着を脱ぐとすぐに、それを取りに行こうとした。しかし、す

(11) 作者は、文康（字は鉄仙、満州旗人、生没年は未詳）。『兒女英雄伝』が出版されたのは1878年のことだという。親の仇を狙う女傑、十三妹こと何玉鳳の物語。1971年平凡社から出版された『中国古典文学大系47』1巻に納められている。

(12) 『兒女英雄伝』中の人物。

(13) 「麵魚子」というのは、小麦粉と水で調合をしてから、適当な量、適当な形で沸かしたスープに入れて煮込んで食べるもの。又は、小麦粉を団子状にして汁の中に落として煮た食品で、日本のすいとんに似る。

(14) 原文は「脚盆」でしたが、脚を洗う専用のお盆という意味である。

でそこには服はなくなっていた。彼女は「ええ!？」と叫んだ。すると突然、扉の外から「ぷっ」と吹き出した笑い声が聞こえた。彼女はびっくりして、顔が赤くなったり白くなったりしていた。急いで、扉を押さえて、「あらイヤだ、二舅老爺——私の服を返してください!」と叫んだ。宝余は、「私を二舅老爺なんて呼ぶなよ!」と言った。金香は、「あなたは二舅老爺だから二舅老爺でしょう! 他に何と呼べばいいんですか? 分かりましたから、先ず私の服を返してもらってからお話をうかがいましょう!」と言った。宝余は大胆ではないので、力を入れて扉を押し開けてもう一度彼女を見る勇氣はなかったが、ただこう言った。「だめだよ。まず、ちゃんと私の名前を呼んでくれなきゃ! そうしたら、服を返してあげる!」金香は哀願して言った。「二舅老爺! お願いだから私の服を早く返して下さい!」宝余は、「言ったでしょう、私を二舅老爺と呼ぶなって!」と言った。金香は少し間をおいてから、声を変えて言った。「早く返してくれなければ、叫びますよ!」宝余は笑って、「分かっているのさ。お前は叫ぶことなんか出来やしないさ!」金香は怒って意地になりお盆の中の濡れた服をすくい上げて絞り、適当に身につけた。

宝余は、やはり若いので、実は彼も彼女と同じ様に顔が耳まで赤くなって、戦々恐々としていた。ただちにその場を離れて、歩きながら、「お前がどうやって叫ぶのか見たいものだ!」と、ぶつぶつ言っていた。ちょうど、宝初が真正面から歩いて来た。宝余の意識が錯乱している様子を見て尋ねた。「どうした?」そして、彼の手の中の服をちらりと見ると、それを見知っていたので、「これは金香の服ではないか?」と言った。宝余はまだぼんやりとしていて、困惑な微笑みを浮かべながら、「そうですよ! 彼女は負けず嫌いだから——ちゃんと私の名を呼ばないと返しゃしません!」宝初は素早く服を奪って、「何をバカなことを言っているんだ、話にならん!」と言った。宝余はやっと夢から覚めたばかりのようで、ちょっと不思議に思いながら眼を大きく開け、「ハー!」と一声だけ発すると、大きく手を振ってその場をたち去った。

宝初は扉をたたいて、「金香!」と呼んだ。金香は彼の声とわかって、扉を開けた。彼女は両手で一所懸命引っ張って、その濡れた服が体に貼りつかないようにしていた。宝初が、「どうしたの? 濡れた衣服何か着

ちゃいけないだろ？」と言った。金香は顔満面を赤くして、服を受け取りながら、低い声で、「ちょうど着替えをしようとしたところ、二舅老爺に服を奪われてしまいました」と言った。彼女の声は、元々泣いたようなしゃがれ声のタイプであるが、声が小さくなると、ますます人のこころを哀しくさせて、気落ちさせるような起伏を帯びる。宝初は何も言わずに行ってしまった。

阮夫人は目覚めるとすぐに鈴を押して人を呼んだ。老夫人はいつもの通り娘とベッドの前で朝見する。阮夫人はいつものように、沈んだ冷やかな表情で「お母さま」と一声かけた。阮夫人の顔色は青白く、長い顔の上から二つきらきらと輝いている大きな目が割れていた。彼女は演じる芝居のない繁漪<sup>(15)</sup>である。まるで『雷雨』<sup>(16)</sup>の中の雨が終始降ってこなかったかのようにであった。

老夫人は言った。「今日は、なぜこんなに早く目覚めかねえ？」阮夫人は、「またそんな風におっしゃるのですか！ 朝は少し寝ようとするのですが、いつも眠れないのです。先ほど、金香が誰かと外でわいわい騒いでおりませんでしたか？」金香が服を奪われた時のあれこれは、老夫人にも少しは聞こえていたが、彼女はただ単に、「ああ……あれ……」と返事しただけで、あえて答える気力はなかった。その時、老夫人の世話をしている栄婆さんは、楊枝をもってきた。老夫人はゆっくりと齒の隙間を掃除していて、一手は口を隠していたので、まるで誰かと耳元で囁くような感じに、神秘的な目つきをしている。阮夫人にはただちに疑心が起って、「金香はいったい誰とあそこで騒いでいたのですか？」と尋ねた。老夫人は、「私は先下で麵魚子を作っていたので、なにも聞こえなかったわ！」と言った。阮夫人は、「栄婆さん、金香を呼んで来なさい！」と言いながら、ベッドから起きて、スリッパを履いた。そして、呼ばれて来た金香を罵った。はじめのうちは、金香は何も言わなかった。すると、さらに罵られることになった。阮夫人は、「この小間使はきっとそこで悪さをしていたに違いないわ！——いったいお前はそこで何を騒いでいたの？」と言った。金香が泣きながら、「なにを？ 二舅老爺ですよ……」と言った。阮夫人は

(15) 曹禺の劇『雷雨』の中の女主人公。

(16) 曹禺の劇『雷雨』を指している。



さらに腹を立てた。自分の兄弟と使用人とでたらめをしていることに怒るだけでなく、敢えて心意気をみせず、わざわざ夫の前妻の小間使に思い知らせてやるといった気持ちも働いて、思いあまって無責任な発言にもなった。「彼（二舅老爺）はもともと女中が生んだから、下司なやつなのだ——彼女（阮夫人）にまでとぼちりがきて罵られてしまう」。阮夫人は、自分のつらいことは言い出せずに、ただ声をあらげてののしった。「お前は死ぬべき小間使だよ！　自分はあるなおかしいくせに、それをまた二舅老爺のせいにするなんて！　お前、かれらにちょっかいをださないで頂戴！　もし今回お前が彼らと何かあったら、すぐさまお前をこの家から叩き出すからね！」　金香は悲しくて泣いていた。まだそこで弁解しようとしていたのだが、老夫人はもういいからと言って、彼女を外に押し出した。そして、「もういいから、行きなさい！　今後はあまりあの兄弟と話などしないでいなさい、相手になるんじゃないありませんよ！」と言った。

阮夫人は怒って胸が痛くなった。煙草に火をつけ、ベッドにもたれて吸って、言った。「もういったいどうなっているのか、宝余に聞かなきゃならないわ！」　老夫人は、「宝余は外へ出掛けたよ。兄弟とも水着を持って虹口へ水泳に行ったわ」と言った。阮夫人は一つの足をベッドの上に踏み、靴下を履いていた。彼女は痩せているので、靴下はどうもピンとしなくて、靴下の腿の所はずうとふくらんでいる。その深い色の靴下は一筋一筋の墨の痕に皺が出ていた。彼女は眉をひそめて言った。「お母さま、貴方も彼らをよく監督なさってくださいさなくっちゃ！　時々宝余は余計なことを言うのが好きだということは、私も感じてましたわ！」　老夫人は気が弱く咳を出しながら、感嘆してこう言った。「おやおや！　一年中一所懸命勉強していて、帰って来たら、冗談の一つや二つ言ったっていいじゃないですか？　あまり抑えすぎてもいけない？」　阮夫人は怒って言った。「お母さまはいつもこうなんですから！　あなたが言わないんだったら、私が言います！」　老夫人は娘の言葉使いが厳しすぎるのを恐れて、慌てて言った。「もういいから、もういいから。もう怒らないでください。後で私がきちんと言うておくから！」

老夫人は、娘を怖がり、息子を怖がり、栄婆さんさえも怖がっている。栄婆さんは名門風格のある女中であつたからだ。背が高く、腰がまっすぐ



していた。旗人<sup>(17)</sup>だからである。満面で忠誠心に燃えているような長い顔は、シュロ色の馬のようだ。老夫人は彼女の主人になって、一生恥ずかしい思いをすることになった。その日、栄婆さんは人の見ていないところで、老夫人にこう言った。「先ほど、金香の嫁入り先を探しなさい、と阮夫人が私に仰いました。」老夫人は言った。「彼女はほんとうに金香を誰かにやるつもりなの？ われらが奥様は本当に……——嫁いだばかりで、前妻の老女中たちを全部追い払ってしまって、後で人にいろいろと言われてしまうわ。ましてや、若い小間使まで厄介払いする何て、ちょっと許されないこと！」栄婆さんは言った。「仰る通りです！——さらに申しますと、この若い小間使を人に嫁がせても、ちょっと厄介です。彼女と若旦那(宝余)たちとの軽はずみな言動はみんなが知っていますから。老夫人、あなたさまも若旦那たちにいろいろと忠告なさらなくては——金香とあのような軽はずみな言動をして、人に見られたら格好がつきません！ お考えにはならないでしょうか？ 老主人<sup>(18)</sup>が亡くなってから、長い年月どれほど苦しい思いをしてきたことか！ 今になってようやく、お婿の旦那さまに頼って、われらが若旦那たちもみんな、旦那さまに面倒を見てもらっております。将来にわたって旦那さまに面倒を見てもらうのです。こんなことが旦那さまに知られたら、たいへんなことになります！」栄婆さんが話しているあいだ、老夫人は全部聞かなくてはならない。彼女は続けて頭を振り、手を振りながら、「もう言わなくて！ わかりましたから。後で宝余にちゃんと言って聞かせます！」

宝初と宝余は、晩ごはんの後によく帰って来た。彼らの義兄も客への応対があり、外へ出掛けていた。阮夫人と老夫人は一緒にバルコニーで涼をとっていた。宝余はシャワーを浴びてから二階に上がって来た。穿堂<sup>(19)</sup>の中は静かに暗いのだが、召使いの部屋には明かり灯っていた。彼は心の中で呟いた、「金香が一人で中にいるのではないのか。もし違ったとしても、スリッパがほしいと云えばいい。」そしてすぐさま扉を押し開けた。そこでは、金香が宝初の帰って来たのを見て、身繕いをしていたところで

(17) 清朝の時の「八旗」に属する人。満族の別名でもある。

(18) ここは、老夫人の亡くなった旦那のことを指している。

(19) 表庭から裏庭に通り抜けられるようになっている廊下。

あった。彼女は一日中仕事をしていたので、顔一面には脂汗が出ていて、とても人には見せられない顔であったので、冷たいタオルを取って顔を拭き、自分の紅綿の一角をちょっと濡らして、手のひらで少し伸ばして、顔に軽くたたいていたところであった。彼女は暗い光の下で背を曲げ、窓枠の上に置いていた小さい鏡にきっちりと顔をあわせていた。鏡の二つの脚が不安定のため、立てることができず一文字に平らかになってしまうのでいつも分けて、細い糸で縛りつけていたのだけれども、未だよろよろしていた。彼女は後ろに一步下がって、顔を全部ガチョウ形の鏡の中に収めたちょうどそのときに、突然、宝余が後ろから彼女の両手をつかまえた。そして軽く笑いながら言った。「ほら、やっと捕まえた！　こうして紅をつけているのにお前はまだ紅をつけていない何て言うのかい？」金香の手のひらは真っ赤だったが、両頬はとても白い。この瞬時、その顔色はさらに真っ青になった。彼女は何の音も立てはしなかったが、なんとかしようと必死にもがいた。宝余のワイシャツの上にはもう真っ赤な紅の一かたまりが着いていた。宝余はそんなことに気を配るどころではなく、ただ、彼女のこの腕に、髪のように細く濃い紫色のセルロイドの腕輪が付けられているのを見た。真白な真ん丸い腕は、まるで一段切り離されてからまた付けたといった、妖しい魅力を感じた。まるで『聊齋<sup>(20)</sup>』の世界にいるような感覚だった。宝余は、彼女の腕の上にうつ伏せになり、ひとしきり匂いを嗅いだ。彼女に必死に押返されて、別の女中のベッドにつまずき転んでしまった。寝台用の板もひっくり返してしまいそうになった。彼の白い靴の片方の紐がよく結ばれていなかったので、ドシンとベッドの下に滑り落ちてしまった。続けて李婆さんが外で叫んでいるのが聞こえた。「金香、大舅老爺が入浴されるから、浴盆<sup>(21)</sup>を洗いにいきなさい！」未だ言い終わらないうちに、扉が押されて開かれた。部屋の中には考えられないような状況が展開していた。宝余は慌てて這い上がり、靴を履いた。金香は、頭を下げてぼうぼうとしていた前髪が顔の両脇に全部分けながら、すぐさ

---

(20) 中国の清代の短編小説集『聊齋志異』を指している。作者は蒲松齡（1640年－1715年）。内容は神仙、幽霊、狐狸の怪異譚で、当時世間に口伝されていたものを筆記してまとめたものである。

(21) 入浴用の大きな桶。

まに外へ出た。

バルコニーに面したリビングルームには無線ラジオが付けていた。ちょうど舞台劇化にされた『王熙鳳大鬧寧国府』<sup>(22)</sup>を放送している。灯の明るい部屋の中では、賑やかな無線ラジオの中の人物の声が充たされていた。その部屋の中にいる人たちは逆に、外の暗黒に追いだされていた。内でも外でも、みな各自勝手なことを言っている。宝初は、阮夫人と老夫人に付き添って、老式大洋房のバルコニーに坐っていた。バルコニーの手摺の各石柱の上には、それぞれ坊主頭のような石球を頂いている。それらはまったく、侠客小説の中にいる、身軽に屋根を伝い、塀を乗り越える坊主のように、陰気にじっと立っている黒い影であった。見る度に少しぞびえる感じがする。なにしろここは自分の家ではない、奇異の場所だ。ここにいて街で走る車のクラクションの音を聞いても、とてもかすかではっきりしないようで、まさに隔世といった感じがする。榮婆さんは芭蕉の扇子をもってきて、宝初に「榮」という字を書いてもらおうとしていた。その後、彼女は入口の灯を使いながら、蚊取線香で少しずつ、この字を炙り出すのだ。

宝初は老夫人に言った。「先ほど、私たちは閨のお嬢さんと彼女のお母さまに会いましたよ。彼女のお母さまからとても情熱的に、われわれを必ず明日彼女の家に食事に来るようにと、誘われました。」閨のお嬢さんと彼らは学年を前後する同窓生だった。彼女は卒業してから、幾つかの社会福利事業に参加していた。外国の貴賓を送迎することも管理していて、毎日のように飛行場で花束を捧げている。まるで中国の国境で生活しているかのようだ。彼女は頻繁に公の場所に顔を出している。真黒の眼をしていて、上が小さく、下が大きな白い丸い顔立ちで、顔のまわりには、まるでよく揃えて切ってはいない蓮の葉のような髪型をしていた。人に逢うと必ず情熱に重々しく人の手を引いて、何分間でも談話して、その後にはまた握手をして別れるという具合であった。

---

(22)『紅樓夢』は、『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』とともに旧中国の傑作古典小説に数えられ、「四大古典小説」とも言われる。『紅樓夢』の写本は、当初約110回存在したと推定されるが、稿本が流出後80回以降が何らかの原因で散佚し、そのまま補足されない状態で作者と思われる曹雪芹が死去。その約三十年後、出版者程偉元の請求のもとで、高鶚が40回を付け加え、活字印刷版の120回本が世の中に出回ることになる。『王熙鳳大鬧寧国府』はその中の一回本である。

老夫人は傍で、「やはりあの——あの閨のお嬢さん？　そういえば、私たちはちょっとした親戚関係のはずよ！」と言った。阮夫人は、「どのお家？」と尋ねた。老夫人は、「ほら、あの閨裕衡の娘ですよ！」と言った。阮夫人は、「ああ、最近閨裕衡は外交部に入ったと聞きましたわ！」と言い、少し間をおいて、「あの閨夫人はもしかしたらあなたがたに特別な意味を含んだのではないの？」と言った。宝初は、微笑んで、「そんなことはないでしょう」と言った。しかし、彼はそうやってしまったことをちょっと後悔した。一つ手は藤椅子の上に置き、その上にある藤のつるを一本一本と取り除くかのようにいじっていた。老夫人は、「あのお嬢さんは何歳でしたっけ？」と尋ねた。阮夫人は、その閨のお嬢さんの年齢についてはあまり興味がなかった。ただこう言った。「閨裕衡の婿になれて、閨裕衡のような義父の推薦があれば、外で働くのは、きっと容易なことでしょうね？　お前の義兄に頼っても——ひと夏かかってはまだ仕事が見つからないのだから……。結局、自分の会社の徐州の分行に入っただけ」。

老夫人はまた心配し始めた。宝初に、「あれ、本当に、徐州にはお前が行くのかね？」と聞いた。すると、阮夫人は、「やはり宝初に行かせた方がいいでしょう。宝余のような子どもみたいな性格では、家を離れるとどうなることやら。」老夫人はそれを聞いてやっと安心した。そして続けて、「それじゃ、この閨家のお嬢さんは……」と言いかけると、宝初は急いで、「あの閨のお嬢さんは宝余とよく似合いますよ。宝余の気持ちは知りませんが……」と言った。阮夫人は笑って、「じゃ、お前はどうかの？　お前も自分の事によく気をつけないと、いまどきは、みんな自由恋愛にご執心だから……。ただ人に紹介してもらうのはいけませんよ！」宝初は笑って、「結婚のことなんて今は未だ何もわかりやしませんよ。自分の事業が成就できた時に、やっとそれについて考えられるのでしょう。」

そう話している時、ちょうど宝余がやって来た。宝初は微笑みながら言った。「宝余、ちょうど良い時に来た。お母さまはお前のためにお嬢さんを探してくれるそうだよ！」阮夫人は、「先ほど、きみの兄は閨家のお嬢さんの話をしていました。私はよいご縁だと思いますよ——あのような家の出の人を他の何処に探せますか？」と言った。すると、宝余は座ったばかりであったのに、またすぐ立ちあがって、手摺の所まで歩き、外を眺

め、軽く笑って言った。「ああ、あの閨のお嬢さん！ 顔全体がまさに外交官夫人といったような感じでした。——私は結構です、私には身に余ります！」老夫人はあわてて、「これはどういうことでしょうか？ お前のお父さまは駐ブルガリアの第一任公使館一等秘書だったではないですか？ お前自身、ブルガリア生まれなのよ！」と言った。宝余はそれには取り合わずに、一人で部屋の中に入って、無線ラジオをまわした。阮夫人は、彼の後ろに付いて入って、冷たい視線で彼を見、やや久しく間をおいてからやっと、「ははん！ お前は入浴したけれど服を換えていませんね？」と言った。宝余は茫然として「換えましたよ」と言った。阮夫人は、宝余の首周りにあった大きな一固まりの紅の跡を指して、せせら笑って言った。「服を換えたばかりなのに、此処にはいったい何をつけているんだい？」宝余は頭を下げて自分で見てみると、思わず顔が紫色になって、すぐにその場を立ち去った。

李婆さんは、宝初を入浴の準備ができたと呼びに来た。老夫人はいつも女中たちと一緒に居る時には、話が多かった。この時も、ちょっと話をする興味が湧いた。自分の生涯で最も光輝いていたある一頁を李婆さんにいつものように語り始めた。宝初、宝余の父がブルガリアに赴任した時、彼女も連れて行った。老婦人は扇子を揺らしながら、「そう！ あの当時は、私はまだ一七歳！ 乗ったのはとても大きなドイツ船でした！ 上も下もすべてがドイツ人。船の中の給仕もドイツ人で、よく世話をしてくれたわ！

——私は若くて苛立ちやすかった……わざとではないのだけれど、船に乗る時に一人の給仕が私を助けに来たのね、でも、彼に手を貸してもらうのが恥ずかしかった。知らないうちに、彼は私と真正面にぶつかってしまったの。私は思わず彼の頬っぺたをぴしゃと打ってしまった。もう少しで彼は海に落ちるところだったわ！ あの公使館の中の部屋も非常に念を入れて綺麗でしたねえ。舞踏会も開かれたわ。あのダンス・ホールは今の上海のダンス・ホールと全然ちがっていてよ——天井も高く大きなホールでした。屋根の所にもガラス窓が付いていて、私は女中たちを連れ、窓の所に伏せて、下を眺めたりしたわ——当時は、慣習や保守的な思想にこだわっていて、男女が抱き合っているのを見ても、恥ずかしくてしょうが

なかった！ 実際あの賽金花<sup>(23)</sup>も、彼らに交じって暮らしていたのではないかしら！ 私たちは彼女のように厚顔ではないだけです！——でも、それもいけません。主人は私が行きたいところに好きに行かせてはくれませんでした。あの頃はやはり若かった、記憶力もいい、フランス語も勉強していました。アルファベットも全部覚ええました——」，そういうと、たちどころにすらすらと暗唱しはじめた。声には多少ユーモアを含む冷たさがあった。「アー、ベー、セー、デー……」。

阮夫人はバルコニーに戻って来て、先刻、二舅老爺（宝余）は金香と一緒にいたのかしら、と李婆さんに尋ねた。宝余は、心細くなって、ワイシャツを着替えに行ってから戻ってはこなかった。その後、阮夫人は、二舅老爺（宝余）にスイカを食べに来るように、と伝言を頼んだ。彼は仕方なくやって来た。阮夫人は何ごともなかったかのように、まず関係のない、ほかの話をした。そして、突然、にこにこした愛想のよい顔つきで、こう尋ねた。「お前たちは、明日閨家に夕食を食べに行くの、それとも昼食を食べに行くの？」 宝余は、「私は行きたくはありません」と言った。老夫人は、「なぜ？ 閨夫人もせっかくお前たちに御馳走すると仰っているのに！」と言った。

宝余は、口をとがらすようにして、「私は行きたくないのです！ そうしないと後でまたよけいな話になってしまいます！」といった。阮夫人は、「お前はいつまで経っても、このように大人になれないんだから！ 人の良いお嬢さまのあら探しをするのね。年がら年中、小間使たちと騒いだりして、私の面目も丸つぶれだわ！」と言った。宝余は、「姉さんはいつもこうなんだから！ 私は閨家に行きたくないと言っているだけで、あーでもないこーでもないという話になってしまう」と言う。すると、阮夫人は冷たく笑って言った。「私が知らないとも思っているの！ 私が見ていなければ何もわからないとも思っているのでしょうか？ 金香と二人でベッドの上で掴み合いしていたでしょう？ 人に何と言われるのか？ さっき、お前のワイシャツの上に付いていたのは何？ お前自分で良く分かっているでしょう！ お前の義兄さんに知られたら、私まで軽蔑されてしま

---

(23) 清末の蘇州の名妓。外交官・歴史学者洪鈞（1839年－1893年）は賽金花を身請けして妻としており、洪鈞の堪能なドイツ語・英語に加え、賽金花の魅力が外交界を驚嘆させた。

うわ！」老夫人は、あわてて、「姉さんが言っていることは全部良いことなのだから、明日閨家に御馳走になりに行くだけのことで、何をいったい怖がるのかね？」と言った。宝余は仕方なく、眉をひそめて、「はい、はい、はい。分かりましたよ。私が行けば、それでいいんでしょう！」と言った。

翌日、彼は一人で閨家に行った。宝初は行かなかった。その晩、阮夫人夫妻と老夫人は、みな無線ラジオを囲んで、馬連良<sup>(24)</sup>の舞台中継を聞いていた。宝初は京劇についてよく分らないので、少し聞いてから一階の自分の部屋に戻った。思いもよらなかったのだが、中に人がいた。彼と宝余の二台のベッドは全部部屋の隅に押し出され、テーブルと椅子も移動され、場所が空けられていた。そして、金香がしゃがみながら、床の上<sup>(25)</sup>で布団カバーを針で縫い付けていた。リビングルームに抜ける、二枚の高く大きな栗色の扉は、とつぷりと暗く閉めきられていて、まるで壁のようであった。床の上にひいてあった一枚の布団はバラ色のつむぎで、灯の下に二本のとても大きな蓮の花が光っていた。まるで、5尺くらいの大きさの、赤く艶っぽい池に少し紅い波があった。金香は素足でその上を踏んでいて、その境界は、まるっきり天上と下界のようであった。

宝初は少しぼんやりとしていたが、金香は頭を上げて彼を見ると、微笑んですぐに立ちあがった。一足の丸い口の布の靴が、隣の床の上に置いてあった。彼女はその靴を履いて、窓台の上に置いてかわかしている市民証防疫証を取りに行き、彼に渡した。そして、眉を顰めて笑って言った。「大舅老爺、これは貴方の服のポケットの中にあったものです。服を洗う時に確認しなかったので、服と一緒に水に入れてしまいました！ この一枚は3カ月分の電車定期券でしょう？」

金香は、恥ずかしがりながら、「半分は当てずっぽで言ってみたのです」と言った。宝初は、小さい声で、「君は本当に頭がいいね」と言うと、金香は、「以前の私たちの奥様<sup>(26)</sup>が、ご機嫌のよい時には、文字を教えてください」

(24) 馬連良 (1901-1966), 字の温如, 回族, 北京人。彼の歌の形が変わっていて美しい一生は“馬派”と称して、当代の最も有力な「鬚生」の派の一つ。1951年に北京京劇団団長。

(25) 「ベッドの上で」との誤記か? 「ベッドの上」で布団を作るのが普通であるが、張のシーン設定かもしれない。

(26) つまり、阮夫人の前の奥様のことを指している。



さいました。——遊んでいたようなものですけど」、と言って、彼女は控え目に笑った。なんだかうら寂しい感じがした。彼女は、あの三カ月の電車定期券を窓台の上で押さえて、ゆっくりとなでて平らにしながら、「この上にあった小さい写真が落ちて来ました——」、と言った。宝初は、その書類をひっくり返してみたが、写真はべつに中に挟まれてはいなかった。あの半分の顔に青いはんこが押された二寸の写真は、彼女にしまわれてしまったのか？ 彼女は続けて、「文字もぼんやりとしていますし……乾けばまた使えるのでしょうか？」と尋ねた。宝初は、「大丈夫さ、どうせ私はもう使わないから。明後日には行ってしまうからね」、と言った。金香は、ぼうっとなって、小さな声で、「あなたが行ってしまう？ どちらへいらっしゃるのですか？」とまた尋ねた。宝初は、「義兄が徐州の銀行に仕事を見つけてくれたのさ」、と言った。金香は、すこし沈黙してから、薄く笑って、「そうですか……。阮夫人から布団のカバーを付けてあげなさいと申し付けられましたので、こんな暑い天気なのに、なぜ布団が必要なのかしらと……」と、言った。

彼女はそう言いながら、また布団にカバーを付け始めた。今回は靴を脱がなかった。バラ色の布団の上にまず両膝をついた。宝初は、思わずついて来て、まるで赤いフェルトの上にいるように、彼女のとなりに膝まずいた。金香は、後を向き入口を見ながら、小さな声で、「早く立ってください、さあ早く！」、と言った。彼は彼女の手を握りしめた。彼女は頭を下げ、腕に縛っているハンカチの上に顔を近づけて涙を拭いた。彼女の顔の紅が滲んだ。紅の涙だった。

宝初は、彼女の言葉を聞いて、起き上った。そして、ただそばで部屋の中を歩き回っていた。やや久しい間をおいて、「私は……将来私が……仕事がかうまくいけば……、私、私……私は何とか方法を考えて……あの時」、と言った。金香は泣きながら、「それはいけませんわ？」と言った。

実際、宝初は、話が口から出ると、自分自身でも聞いていて本当のことのように思えなかった。しかし、相変わらず言葉が口をついて出てきてしまう。「なぜいけないの？ 私が言いたいのは、私が自立できたら……君は私を待っていてほしいんだ、いいかい？ 承知だね」。金香は、頭をふって、極力涙を堪えて、顔色は両頬の紅の下で青くなり、まるで青林檎

のようになりながら、また頭を振って、言った。「私は承知しないのではありません。そんなことできはしないのだと分かっているのです！——ああ、馬鹿だわ、私、あんなに大きな針をどこに刺してしまったのかしら？」

心が乱れていると、ますます見つからない。彼女は布団のところどころをつまみでは、言った。「綿の中に入ってしまった方がいいわ、だって危ないもの！」宝初もしゃがんで彼女を助けた。二人は一枚の布団のあちらこちらをめくり上げたが、いつまで経っても針は見つからなかった。「この針に刺されて死んでしまうのも、悪くない。全然意に介すことはない」、彼の心の中には、どうしてもそのような考えが浮かんでいた。

しかし、いざ出かける日になって、金香は暇を見てまた宝初に声をかけた。「針が見つかりました。」それは、彼女の本綿服の胸の方についていた。もう安心してという意味のその言葉を聞いて、彼は却って失望し、さらに一層深い拒絶の意味を感じた。しかし、それもこれもすべて彼自身のせいなのではないのか？宝初も、実はなぜ彼女の返事があんなにも断固としていたのかを知っていた。——それはただ単に、宝初が余りにも断固としていないことが、まさにその原因なのであった。

黄包車の上に坐り、荷物を抱えた膝の下でカバンを押えつけていた。彼は一つの手を空けてズボンのポケットに入れ、車代を支払う小銭はあるかどうかを見ようとした。触てみると、意外にも一つの白いシルクの小さなケースが出てきた。それを開けてみると、その中の両面が共にプラスチック紙が嵌め込まれていて、彼の市民証と防疫証が入っていた。あの白いシルクは多分靴の生地に残りで、シルクの裏地に短い黄色紙の帯がついていて、よく精密に思いがめぐらされていた。たぶん、彼女にとって、男の身の回りに携帯する物で、これより以上に上品で、相応しいものはなかったであろう。しかし、よく見ると本当に貧乏くさくて笑われるようなもので、使えそうもなかった。市民証とちょっと同じ大きさで、寸法は余りにも正確であり、少し小さいので気に入らなかった。宝初は、駅でその証明書などを一度使ったきりで、もう中に入れなかった。余りにも面倒だったからだ。

しかし、宝初は、いつもそれを手元に置いている。便箋、封筒などのものの中に混ざっておいてあった。

その市民証入れのケースはちょっと時間を経つと、めちゃくちゃになった引き出しの中から現れて出てきた。そして、彼の無意識の内側をかき回して、それを見ると心の中が痛ましい思いになってしまう。しかし、どうしても捨てられなかった。そのようにして二、三年の歳月が流れ、その後、とても曲折な方法を考え出して、彼はそのケースを送り出した。ある日、彼は図書館である一冊の小説を借りて読んだ。とても厚い一冊で、あまり通俗的なものではない。フランス綴じのその本の二頁位は切り離さなくても何ということとはなかった。彼はその市民証ケースを、本の後半の感傷的に高まっていく頁の間に挟んだ。そして、本を棚の上に戻した。もしこの本が好きな人がいたとしたら、それはきっとある程度理解力のある人であろう。その頁を読んだ時の心境は、きっとがっかりしてふさぎこむに違いない。そんな時、こんな小さなものが本の中に挟んでいるのを見て、もしかしたら、その中の「わけ」を推量できるかもしれない。少なくとも……他の人に捨てて貰いたいという気持ちであった。当時は、彼は自分のこの処理の仕方は、とても巧妙だと思えた。後で思い出すと、非常に無意味で、笑うべき所業だと思った。

彼はだんだんと中年に入った。そして、やっと結婚した。金香もすでに嫁いでいた。姉夫婦は、宝初のこの夫人に対して、まあまあ賛成していた。しかし、一つだけ、小さいことで、ついに姉を怒らせた。姉には一つ癖がある。人に、ついでに何かものを頼むという癖だ。そしてその範囲は広く、一般のご夫人たちのように、せいぜい香港からシルクのストッキングやウールの生地などに限って頼むというわけではない。彼女は終日家で寝たり、横になったりしているが、いつも全世界の人たちを使って転々としたがる。彼女はいつも、宝初が徐州から戻る折に物を頼むが、彼にはいつも不満だった。彼には頼みごとができないと言っていた。彼が結婚した後に、彼女はどうしてもある女中を徐州へ連れて行くように推薦した。宝初は、そんなに面倒なことはする必要はないと思った。彼の夫人もいざこざを怖がるので、自分の親戚の人たちに、自分たちの私生活の仔細を覗かれたくはない。たとえ節約していたにしても、浪費していたにしても、すべて親戚中の人のお話の種にされるのがオチである。その女中も、あまり徐州などには行きたくはなかった。内地に住むことになる、水運びをしなけ

ればならないと聞いていたからである。しかし、阮夫人は全部宝初のせいにし彼女は非常に不愉快だった。その頃、宝初は徐州分行の会計科主任の地位にまで上がっていたが、もうどうしても、それ以上に出世することができなかった。彼のような人間は、一生金持ちにはなれないと、よくよく知るべきである。

ある年の春休み、彼はひとりで歯を治しに上海に来た。二本の歯が虫歯になったので抜かなければならなかった。宝余と閻のお嬢さんとが結婚した後、閻のお嬢さんは老夫人を少し見下げていた。したがって、今でも老夫人はまだ娘のところに住んでいた。宝初は二回ほど、老夫人を訪ねたが、彼はむしろある友人のところに泊るのが好きだった。老夫人は新しい入れ歯を付けた。宝初は、彼女と同じ歯医者を探して出かけた。歯医者は一軒のマンションに住んでいて、エレベータに乗って上げられなければならなかった。その日は、もうすでに一人の女中がワンちゃんを抱いてエレベータの中に立っていた。宝初は、思わず彼女を何回も見た。以前の金香よりも若く、せいぜい一五、六歳の感じではあったが、一對の逆さになった瓜型の目<sup>(27)</sup>で、顔全体のがむしゃらな表情であった。規則では、女中たちはエレベータに乗ることはできないので、エレベータの管理員は眉を顰めて、「行け！行け！行け！」と叱った。その女中は返事をせずに、ただ犬の匂いを出していた。ちょうどその時、何人かの女中たちが市場で買い物に行って帰ってきた。騒いでいる間に、がやがやとついでにエレベータに乗ってしまった。エレベータの管理員は文句を言いながらも、仕方なく諦め、彼らは一緒に上がった。おしゃべりでうるさかった。そこで、宝初は、「金香」という呼び声を聞いたように思い、ぎくりとした。まるで、自分の独り言が声にまで出てしまったのではないかと自らを疑った。あまりにも混雑していて、本当によく見えなかった。頭をあまり前へ突き出しすぎてだめだ。しかし、先ほど彼女たちがエレベータに入ったときのことを思い出すと、みな普通の女中であった。特別な人は誰もいなかった。たとえ彼女であったとしても、もう随分変わったであろうが、わからないわけではない。広々とした人波の中に沈んで、弁別がつかなくなった。なら

---

(27) 張愛玲の原文は「倒掛瓜子眼」。よく、「倒掛瓜子臉」として使うが、張愛玲の誤記か。

ば、見なくてもいい。エレベータの扉の上に一つ丸い窓が掘り出されている。窓の上には一本の鉄梗子の花が嵌めこんである。ただ一瞬だけで、もうなくなった。もう一階上がると、暗闇の中からまた一つ窓穴が現れた。一本の花の黒影が斜めに一輪の明月を貫通していた。明るくなると暗くなり、また明るくなると、暗くなった。

エレベータは三階に止まった。そして四階にも止まった。エレベータの中の人たちがだんだんいなくなっていく。残った人たちの中には、どう見ても金香に似る人はいなかった。

上海を離れる前の日、また姉の家に行った。その晩、宝余の夫人もそこにいた。彼女は以前、閩のお嬢さんであった時とあまり変わらなかった。ただ体型がさらに緩く太くなって、ますます雪人に似てきていた。真白の顔に二つの真黒の目が嵌めこんであって、ほおのところに薄い紅を付けている。客と応接するときには、依然として莊重且つ活発であった。宝初は彼女を見て、悪くないと思った。自分の夫人と同じで、みんなまるで一生、夫人でいたような人たちであった。当初はなぜ彼女たちを娶ったのか、あるいは彼女たちを娶らないのか、今となってはもう追究することもできない。

彼は少し惘々とした感じになったが、突然、注意すると、阮夫人がもう一人女中を増やしたと言っているのが聞こえてきた。老夫人は、「本当に、お前は金香を呼べばよくはない？ 彼女は仕事が真面目でしたよ」、と言った。老夫人は金香にずっと好感を持っていた。なぜならば、「その子の口は甘かったから」である。阮夫人は、もったいぶって言った。「彼女は嫁ぎ先が良かったのでしょうか？ おかみさんになったのよ！」老夫人は、「そんなことはないはずよ。私はあの日、齒医者に行った時に、彼女を見かけたわ。仕事を頼まれていましたよ。彼女は齒医者の下の階に住んでいる人の家で働いているのよ。あの一家は人が多くて大変ね。彼女の夫は彼女に優しくないものだから、彼女に金もやらないみたい。だから、彼女は怒って外で働くことになったの。まだ二人の子供を養っていますよ」、と言った。閩のお嬢さんは微笑みながら聞いた。「昔、宝余を好きになった、あの金香ですか？」

宝初は、この話を聞くのをやめた。心の中がとても苦しかった——なん

## 鬱金香

でこの世の中のいろいろな事柄は、みんなこんな風に、黒白と分別が付かないでいるのか？ 彼は窓の前に行き、灯を背にして立っていた。背後の女たちの笑い声、話し声は、一時的にぼんやりとしていった。街を過ぎ通った盲人が、鉢を打つ音が、一声一声、とてもよく聞こえる。聞いているうちに、まるでこの夜が更に黒く、更に深くなっていくようであった。

原テキスト：「鬱金香」『色・戒』  
(皇冠文化出版有限公司2007年所収)